

【なぜヨハネは癒しとパンの奇跡を記した？】

ヨハネ福音書5章38年病人の癒しと6章五千人のパン

福音書を読む #28

OpenAI o1によりスクリプトを文章化 2025.2.25

ヨハネ福音書の5章と6章には、いわゆる「しるしの奇跡」の物語が記されています。まず5章では、ユダヤ人の祭りのときにエルサレムで行われた、38年も病気を患っていた人が癒される奇跡が描かれています。一方で6章には、5000人もの人々にパンを食べさせた奇跡が記されています。ヨハネはこの福音書の終わりの部分で、この書に書かれていない多くのしるしがほかにもあったことを述べており、数ある奇跡の中から選び抜いて記しているわけです。

5章と6章の間には、他の福音書と比べると1年ほどの期間が空いていると考えられます。38年もの間、病にかかっていた人が癒されることも、5000人にパンが与えられることも、モーセの時代の荒野の導きを思い起こさせます。荒野の40年のうち、とくに神様の声十分に従わず荒野を歩まなければならなかったのが38年だったという背景を思い出すのです。さらに、この病人が横たわっていた回廊には、さまざまな病気や障がいを持つ人々が大勢いましたが、その中でも特に深刻な状態だった人が癒され、歩けるようになったのが安息日だったということは、問題が解決されて安息に入れられるという象徴的な意味を含んでいると考えられます。

この癒しの奇跡を目撃した人たちが多くイエスのもとに集まり、やがてガリラヤ湖のほとりには5000人ももの群衆が集まっていた。イエスはその人々に対して、わずかパン5つと魚2匹で食事を与えます。ここにもモーセの時代に荒野で与えられたマナの出来事を思い起こさせる要素があります。そして、イエスが「私は天から下ってきたパンである」と語ると、ユダヤ人も弟子たちもつぶやき始めますが、この姿はエジプトを出た民が「肉がない」「パンがない」と嘆いたときに、モーセとアロンが「パンが天から降る」と告げたものの、民がつぶやいたという出来事を連想させます。その時にモーセは「あなたがたのつぶやきはモーセに対するのではなく、神様に対するものだ」と言われました。同様に、この福音書の時代も、荒野のイスラエルが奴隷の家から救い出されたように、光のもとへと連れ出されようとしている時代なのです。そして、それは本当の安息に導かれる時代であることを示唆しています。死んだ者たちが神の子の声を聞いてよみがえる、終わりの日のよみがえりがいよいよ到来するということを指し示しているのです。

ヨハネはこの福音書を書き記した目的をはっきりと述べています。すなわち、イエスが神の子キリストであることを信じるように、そして信じてイエスの名によって命を得るように、という二つの点に要約されます。ヨハネ福音書の全体を貫くテーマとして、

1. イエスが神の子キリストであることを信じる
2. そして信じて命を得るということが示されており、5章は「イエスが神の子キリストであることを信じる」ことに焦点が当てられ、6章は「信じて命を得る」ことが大きなテーマとなっています。

また、ヨハネ福音書は他の福音書と違い、しるしの奇跡の後、その意味を解き明かす長い教えが続く特徴があります。5章の癒しの奇跡においては、なぜ安息日にこの奇跡が行われたのかという議論が進みます。ここでは「父が善と悪を裁くために子を遣わした」ことが示され、遣わされた方を信じる者が命を得るのだと教えられます。一方、悪を行う者が裁かれるかどうかは、神の子の声を聞くかどうかにかかっています。パプテスマのヨハネもまたその裁きを証言する声でしたし、モーセの教えも本来は神の愛を指し示す言葉でした。すなわち「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神、主は唯一である。あなたは心を尽くし、命を尽く

し、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という第一の戒めがすべての根本にあります。かつて荒野のイスラエルにはモーセが遣わされ、神の声と律法とによって導かれましたが、同じように、主イエスが神の子キリストであることを信じるようにと呼びかけられているのです。そして信じた者が命を得る、という教えが6章に展開されていきます。

6章では、5000人にパンを与えた奇跡の後、イエスが弟子たちに「私は天から下ってきた命のパンである」と教え、終わりの日によみがえらせるということを繰り返し強調します。子を遣わされた方のみこころは、子に与えられた人を一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることにあると説明されます。イエスが「命のパン」であるというのは、命を与えるパンであるという意味であり、「生きているパン」という言い方もできるでしょう。生きている父が遣わす生きている子であるイエスのもとの来る者は、生きる者となるのです。ここで「食べて飲む」という表現が出てきますが、それは単に物質的な食事のことではなく、永遠に生きるための霊的な糧を受けることを示唆しています。つまり、御子の言葉と御霊が真に命を与える食べ物なのです。

実際、モーセの時代のマナの授与には「人はパンだけで生きるのではなく、主の口から出るすべてのもので生きる」という真理を教える目的があったと聖書は記しています。にもかかわらず、当時のイスラエルも、イエスの時代のユダヤ人たちも、祭りやしるしをよく知りながら、結局はイエスに対してつぶやき、不信仰のゆえに離れていってしまいます。それどころか、イエスを殺そうとする動きさえ起こり、弟子たちでさえ去っていく者が出てくるのです。

このように、ヨハネ福音書の5章と6章は、モーセの時代の荒野における出来事を背景にしながら、イエスが神の子キリストであることを信じること、そして信じることによって命を得ることへと、人々を招いている場面と言えます。ヨハネはこれらの奇跡とその意味を通して、終わりの日のよみがえりと永遠の命を与える神の子キリストとしてのイエスを力強く証しているのです。

OpenAI o1の評価

この分析は、ヨハネ福音書5章と6章の「しるしの奇跡」がモーセの荒野の出来事と関連づけられ、さらにヨハネ福音書の目的（イエスが神の子キリストであると信じ、その名によって命を得ること）に即してよく整理されていると思います。以下にいくつかのポイントを挙げながら評価します。

1. モーセ時代との対比

- 38年の病の癒しと荒野の38年を重ねて解釈する点、またマナと「天からのパン」とを対比させる点は、ヨハネ福音書特有の「イエスのしるし」と旧約背景との関連性を示していて興味深いです。こうした旧約的文脈（特に出エジプト記や申命記を想起させる描写）をしっかりと取り上げていることは、聖書の文学的構造を探究するうえで大切な視点だと思われます。

2. 安息日と安息の象徴

- 5章の癒しが安息日に行われたことの象徴的な意味を「問題が解決し、安息に導かれる」という文脈で示唆していますが、これはヨハネ福音書が提示するイエスの権威・神性の強調とも結びつきます。ヨハネ福音書には「わたしの父は今に至るまで働いておられる」という有名な言葉もありますが(5:17)、その背景ともつながるため、分析の中でもう少し詳しく言及しても面白いところです。

3. ヨハネ福音書の目的と構成

- ヨハネ福音書がはっきりと示す目的（20:31）を軸に、「5章＝イエスが神の子であると信じること」「6章＝信じる者が命を得ること」と二分して整理しているのはわかりやすいです。実際のところ5章・6章だけでこの二分法をすべて説明しきれぬかは議論の余地がありますが、少なくとも5章ではイエスの権威と神性、6章では命のパンの教えと「永遠の命」がテーマになっているのは確かであり、全体像を簡潔に示す助けになる視点だと思います。

4. 「しるしの後の長い教え」の特徴

- ヨハネ福音書では、しるしが行われた後にしばしば長めの対話や説教（ディスコース）が続き、しるしの意味づけが丁寧になされる点が特徴的です。分析の中ではこの点についても言及されており、5章・6章におけるしるしと神学的解釈の関係が整理されているのは好印象です。

5. つぶやきと不信仰のモチーフ

- 荒野のイスラエルの「つぶやき」と、パンの奇跡を見ながらも「イエスにつぶやく」群衆（あるいは弟子）の姿を重ねて描いている部分も、旧約背景との連続性が強調されていて適切です。ヨハネ福音書が示す「光と闇」「信仰と不信仰」の対比にもつながり、イエスを神として受け入れるかどうかを試されている、という構造がよく表れています。

6. 補足・発展の余地

- 5章で「ユダヤ人の祭り」とあるものが何の祭りであったかは諸説あります（過越の祭り、仮庵の祭り、または別の祭りなど）。分析では特定してはいませんが、もし祭りの背景をもう少し詳しく掘り下げると、さらに文学的構造や時期的な流れがはっきりする場合があります。
- 6章での奇跡から「パンのいのちの説教」への流れをより詳しく見ると、「弟子たちが離れていく」（6:66）というくだりが神学的・文学的に重要な位置を占めますが、今回の分析でも概略的に触れられているものの、もう少し深掘りできるとより理解が進むかもしれません。

総合的に見ると、この分析は**旧約の背景を踏まえつつ、ヨハネ福音書が描くイエスの神性や「命」を与えるメシア性を深く読み取ろうとしている点**で非常に良い内容だと感じます。ヨハネ福音書は他の福音書よりも神学的・象徴的表現が豊かで、旧約聖書のさまざまな出来事や言葉との結びつきを意識して読むことが求められますが、その点が丁寧に扱われているのは評価に値します。

「なぜ38年なのか」「なぜ安息日に癒しが行われたのか」「なぜパン5つと魚2匹での奇跡に続いて長い説教があるのか」といった問いを、**旧約の荒野の出来事やヨハネ福音書の目的宣言（20:31）**を軸に回答するという構成は、聖書神学的な読み方として説得力があります。全体としてまとまりがよく、ヨハネ福音書5章と6章を理解するうえで有益な視点が示された分析だと言えます。